

ハイデガーにおける教育の語り

—— 講演録「伝承された言語と技術的な言語」を読み直す ——

盛 楓菜

1. はじめに

本稿の目的は、マルティン・ハイデガー（Martin Heidegger, 1889–1976）が1962年におこなった講演「伝承された言語と技術的な言語」¹⁾の議論を紐解くことで、ハイデガーが教育に対して提起している論点と主張がいかなるものであるかを明らかにし、ハイデガー哲学に着目した教育学研究の新たな方向性を得ることにある。

20世紀の哲学に深い影響を与えたハイデガーの哲学は、今日、哲学研究の枠組みを越えて、教育学研究にも新たな光を投げかけようとしている。彼の主著『存在と時間』は、存在の意味を現存在の実存論的分析から時間において解明しようとするものであるが、近年の研究ではそうした主著の議論からさらに他の著作にみられる芸術、詩、言語、技術にかんする議論を含めることで、彼の存在論をより包括的に捉え直す動きが進んでいる。こうしたハイデガー哲学における存在の思索は、人間の在り方について多彩な考察を展開する教育学研究にも影響を与えており、とりわけ2000年代以降、彼の存在論を教育学的に取り上げる動きがひろがりをみせている²⁾。この研究動向には主としてふたつの方向性を確認することができる。ひとつは、これまで哲学研究のみで論じられてきた存在の問いを教育学の文脈で再解釈することで、教育学と存在論の架け橋を描き出そうとする研究である（井谷2013；Thomson 2005）。もうひとつは、デューイをはじめとした既存の教育理論のうちにハイデガーの哲学的存在論との共通性を明らかにしようとする研究である（Agness 2019；田中2019）。両者の研究は、教育学と存在論の関係性を外在的／内在的に捉える点で相違がある一方、ともにハイデガーが切り開いた存在論の視野に立ち、存在者の次元にとどまらない教育理論の構想を試みる点に、共通の志向性を持っているといえよう。

このようにハイデガーに着目した現在までの教育学研究は、存在論の理論的内実には教育学的意義や可能性を見いだし、それを新たな教育理論の構想に応用するものである。だがしかし、こうした研究動向をあらためて振り返ってみると、そこには看過されてきた視点があるように思われる。その視点とはすなわち、ハイデガー自身は教育について語っているのか、という点についてである。この視点が見落とされてきた背景には、ハイデガーは

教育について直接的な言及をしていないといった見解が自明とされてきたことが挙げられる³⁾。そうした見解の根底には、公刊されているハイデガーの著作や講義録・講演録のなかに教育に関する論稿がないといった「文献上の事情」から、彼自身の教育／教育学への明白な主張を発見することが困難であるといった前提がある。それゆえにハイデガーに着目した教育学研究は、ハイデガー自身による教育への語りがいかなるものであるかを主題的には取り上げてこなかったように思われる⁴⁾。

以上の問題意識のもと本稿で考えてみたいのは、はたしてハイデガーは本当に教育について語っていないのか、ということである。本稿ではこの論点を、講演録「伝承された言語と技術的な言語」から検討することで、ハイデガー自身の視点から教育について再考する方向性を提起することを目指す。後述のように、同講演録は1962年にコンブルフの国立教員養成アカデミーで行われた実業学校の学科教員のための講習会でハイデガーがおこなった講演をまとめたものであり、ハイデガー自身の教育に対する主張・立場が示された論考のひとつであると考ええる。この講演録を手がかりに、本稿は以下の手順に従って考察を進めていく。まず第2章では同講演において議論されている事柄を「学校」、「技術」、「言語」の観点から整理する。そのうえで第3章では、教育に関してハイデガーが示している論点が(1)技術時代において存在の問いが問われないことについて、(2)Bildungを問い直す必要性についての2点にあることを提示する。第4章では以上の考察を総括したうえで、ハイデガー哲学の主題である「存在の問い」が教育にも同様に求められていることを明らかにする。最後に第5章では、ハイデガー哲学に着目した教育学研究の新たな方向性として、Bildungや人間学に対するハイデガーの批判を具体的に解き明かす必要性を提起する。本稿での考究から、「存在論と教育学」という今日に重要なテーマをハイデガー哲学から見届けるための新たな道として、ハイデガーの展開する教育批判をたずねていく必要性が示される。

2. 講演録「伝承された言語と技術的な言語」を紐解く

講演録「伝承された言語と技術的な言語」は、1962年にコンブルフ（シュヴェービッシュ・ハル）にある国立教員養成アカデミーで開催された実業学校の学科教員向けの講習で、ハイデガーが行った講演の手書き原稿が底本となっている。講演録のあとがきによれば、この講演はハイデガーの息子であり、当時、実業学校の教師であったイェルク・ハイデガーの提案と仲介によって実現されたものであるという（ÜT, 30）。講演録自体は、マールバッハ・ドイツ文学文書館に保管されていた未刊の講演テキストであり、1989年に息子のヘルマン・ハイデガーの編纂によってエルカー社から刊行されたことで日の目を見ることとなった。

講演の主たる目的は、技術にかんする今日的な問題を言語の観点から考察することにあるが、学校教員向けの講演であるという性質上、技術をめぐる諸問題が教育——とりわけ学校教育——の観点から切り込まれ考察されている。こうした特異性に着目して同講演を取り上げている先行研究は、筆者の管見の限りでは確認できていない⁵⁾。では、この講演のなかでハイデガーは何を語っているのだろうか。以下では、その議論の内容を「学校」、「技術」、「言語」の3つの観点から整理してみたい。

2-1. 技術時代の学校の危機

まずハイデガーは、同講演の目的が世間一般で言われている技術、言語、伝承の概念をあらためて思索し直すことで、それらの概念が「今日存在するもの」を経験するに至るように再規定することにあると述べる。この「今日存在するもの」とは、「われわれ現存在を襲い、脅かし、そして圧迫するもの」(ÜT, 5)であり、現存在の開性——われわれ現存在が存在するということに開かれた者であること——を抑圧する事柄を意味している。ハイデガーによると、上述の概念の規定においてはこのような抑圧をありありと経験することが必要であると述べる。

「そうした経験は必要である。なぜなら、われわれが存在するものに対して盲目的であり、そしてわれわれが技術と言語の通俗的な観念にかたくなに囚われたままでは、その場合、われわれは学校から——その使命と職務から——、それにふさわしい決定的な力を取り上げ、捨て去ることになるからである」(ibid)。

ここでハイデガーは抑圧の事実を目を向ける経験から、何が現存在を圧迫しているのかを知ることの意義を提起している。より具体的に言えば、ハイデガーは講演の聴衆である教師に対して、現存在として存在に開かれた在り方を脅かすものが何であるかを教師自身が経験し、理解することが必要であると提起していると言えよう。ではいったい、ここでハイデガーのいう「学校にふさわしい決定的な力」とは何であるのか。

この問いに対する答えは明確には述べられていないが、考察の手がかりとして着目したいのがハイデガーによる学校批判の一節である。ハイデガーは学校を「小学校から大学までの学校制度全体」と定義したうえで、とりわけ大学や実業学校が今や「産業時代においてその職務とともにあるところの背後にぶらさがっている」ことを指摘している(ÜT, 6)。ハイデガーにとって、産業化・技術化の時代がもたらす有用性や実用性の観念に固執することは「学校にふさわしい決定的な力」を自ら取り逃がしていくことにはかならないものである。ならば「学校にふさわしい決定的な力」とは、いったいどこから再起してくるのだろうか。

技術時代の学校を批判することでハイデガーが提起するのは、「省察への目くばせ (ein Wink zur Besinnung)」の必要性である。省察とは「役に立たないものへの意味を呼び起こすこと」(ibid) である、とハイデガーは述べる。たしかに役に立たないものは有用性の価値思考の下では空虚そのものであるが、ハイデガーはこうした思考の下で役に立たないものを否定することは、「事物の意味」そのものを捨象してしまいかねないと指摘する。事物の意味は「そのものから直接に実用的なことはなにもなされないが、そうした意味でしか役に立たないもの」であり、「こうした事物の意味なしには、役に立つものもまた無意味なままであり、それゆえ役立つこともない」(ÜT, 7)。ここにハイデガーは、『莊子 (南華真經)』を引用して、「役に立たないものに有用性の尺度を当てるとは見当違いなこと」であり、「役に立たないものは、それからはなにも生みだされないことによって、それ自身に特有の偉大さと決定的な力をもつ」ことを主張する (ÜT, 8)。

こうしてハイデガーは、技術時代に特徴づけられた学校の在り方を批判したうえで、本来の学校にふさわしい力の再起を「省察への目配せ」の必要性において提起する。では省察への目配せは、教師にとっていかなる意味を持つのだろうか。ハイデガーは次のように述べている。

「したがって、われわれは世間一般に言われている「技術」、「言語」、「伝承」の名称における事柄と事態をあえて省察するが、そのような試みは、実践的授業形成を取り上げる教育の講習での考察に対して、直接的にはなにもをもたらさない。それにも関わらず、役に立たないものに目を向けることは、あるひとつの視野を開きうるだろう。それはすなわち、それに特別の注意を払わない場合でも、あらゆる教育的－実践的考察 (alle pädagogisch-praktischen Überlegungen) をつねにいたるところで規定するような視野である」(ibid)。

役に立たないことに目を向けることは、教師の日々の教育活動や教育実践をより深いところで規定している事柄に目を開いていくことを意味する。つまりここでハイデガーが示していることは、技術時代に吸収された有用的な学校体制や成果主義の教育実践とは異なる見方で、学校の在り方を考えなおさねばならないということである。具体的に言えば、それは技術時代にとって学校や教師が「役に立たないもの」へと目を向けることを求めることである。

2-2. 現代技術の人間学的－道具的観念の問題性

さて以上の問題提起からハイデガーが取り組むのは、現代技術に関する今日的観念と特徴を分析することであり、そこに内在する問題をギリシア思想に即して捉え直すことであ

る。

ハイデガーは現代技術の今日的観念に通底する根本特徴として、第一に、現代技術の人間学的性格を挙げている。技術が人間学的性格として捉えられるのは、それが「人間によって人間のために新たに考案され、実行され、開発され、操作され、確保されるもの」(ÜT, 12) と、一般的に認められているためである。ハイデガーによると、こうした技術の人間学的性格は近代自然科学に基礎づけられており、とりわけ今日の技術は「人間の人間性、すなわち人間らしさを育成し、発展させ、保護することを目的とする」(ibid) 文化の一部分としてみなされ、促進されている。また技術の人間学的性格とあわせて確認できるのが、技術の道具的観念である。というのも、われわれが一般的に理解している技術とは、産業的な目的を実現するために人間によって考案され製作された「手段」である点で道具的である(ÜT, 11)。こうして技術は人間の発展のための手段として、実用性や有用性に根ざした利益の実現や、潤沢な産業社会を切り開くことに、人間を駆り立ててゆく点で人間学的で道具的であると考えられている。

こうした技術の根本的特徴を分析したうえで、ハイデガーは次のような興味深い問いかけをおこなっている。

「技術教育、ひいては技術そのものが、どのような意味で人間性の形成(Menschheitsbildung)に寄与するのだろうか。それとも、そうした技術は人間性の形成を危うくし、混乱させるのだろうか」(ÜT, 12)。

残念ながら、講演のなかでハイデガーがこの問いに回答することはなかったが、一方で次のような示唆に富む視点を残している。その視点とは、「正当性」を超えてゆくことの意義についてである。ここでいう正当性とは「あらゆる分野においてその基準となる思考法として先導をもたらす点で、さらに確かなものとされ、堅持されている」(ÜT, 13) ものである。だがしかし「正当性はすでに真であること、すなわち事物において最も固有なものをわれわれに示し、保護することではない」(ÜT, 14)。つまり現代技術の人間学的－道具的観念について、それがたんに正当か否かにおいて考えられるだけでは技術の本来の意味は看取されないというのがハイデガーの主張である。

ではいったい技術の本来の意味とは何であるのか。ここでハイデガーは、「技術」の語をギリシア的語源において理解することにとりかかる。技術の語源はギリシア語のテクニコンであり、それはテクネーに属する。テクネーは、「ある事柄の前に立ちどまって、それを理解する」(ibid) エピステーメーと共通の意味を持つ。こうした理解のもとで、ハイデガーはテクネーを次のように再規定する。

「テクネーとはなにかに精通することであり、それもなにかの製作に精通することをいう。〔……〕精通するとは、看取すること、看取してしまったことのひとつの在り方であり、そして知ることのひとつのあり方である。ギリシア的経験にしたがえば、看取の根本的特質は、現前するものとして目の前にあるものを開き、明らかにすることにある」(ÜT, 14f)。

すなわち「テクネーは作ることについての概念ではなく、知ることについての概念」(ÜT, 15)である。知ることとしてのテクネーに属する技術は、「覆いを取り去ること (Entbergen) としてのテクネー」であり、その意味は、「こちらへとー前へとーもたらすこと」(GA7, 14)である。この「こちらへとー前へとーもたらすこと」はプラトンの思想に依拠したものであり、「現前するものを輝き現われへともたらす」ポイエーシスとして理解される (GA7, 12)。ポイエーシスは、日本語では「制作」や「創造」と訳されることから分かるように、芸術家や詩人の仕事によって「輝きにーもたらし、形象へとーもたらすこと」であるが、もっとも根本的な意味としては「ピュシス」——「それ自体ーからー立ち現れてくること」——であるとハイデガーは述べる (ibid)。ハイデガーによると、ピュシスにもとづく現前は、花がそれ自身において咲きほこるように、それ自身によって、それ自体のうちに秘匿されているものを裂開 (Aufbruch) する (ibid)。すなわち、「それ自体の固有性を出来させる」(GA7, 9) ことである。ここにハイデガーは、現前するものを開き明らかにする「知ること」として技術の本来の意味を取り戻そうとするのである。

2-3. 本来的な言語の再考

さてこうした知としての技術を提起することから、講演の終末では技術時代の言語の問題について検討されている。ここでハイデガーは、技術時代のなかで言語もまた技術的な理解に陥っていることを指摘する。今日理解されている言語は、第一に人間の能力として、音声化と聴取との機関を働かせ、意思疎通のために、あるいは現実／非現実的なものとして表現するためといった手段としての理解に特徴づけられている (ÜT, 21)。さらにこのような言語理解は、現代技術の道具的観念からいっそう促進されている。ハイデガーはその一例としてモールス信号を挙げ、言語が情報的なものとして「一義性、確実性、迅速ゆえに、言語の最高形式」(ÜT, 25) とみなされることを指摘している。

ここからハイデガーは、言語を記号の発信や伝達のみを理解しようとするのが言語の本質的な意味をひたすら覆い隠し、言語概念を矮小化させていることを批判する。ならばいったい本来的な言語とはどのようなものであるのか。ハイデガーは次のように主張する。

「言語の本来的なこととは、現前するものと現前していないもの、つまり広い意味での

現実性を示し、現出させることとしての言うことである」(ibid)。

ここでハイデガーが主張する本来的な言語とは、「示すこととしての言うこと」である。「話すことは本来的には言うこと (Sagen)」であり、言うことは「ツァイゲン (Zeigen)」、すなわち「示すこと」を意味する (ÜT, 23)。そして、ツァイゲンとは「なにかを見聞きさせること、なにかを現出へともたらしことを意味する」(ibid) 存在の出来にかかわる。すなわち示すこととしての言語は、存在の生起そのものである。ここからハイデガーは現前をもたらし本来的な言語について、教育の観点から次のように述べている。

「したがって熟考されねばならないことは、母国語の授業が、産業時代の諸力に直面するゆえに、専門教育に対するなにか一般教養としてではなく、それとはまったく別のものである、ということについてであろう。つまり考えられねばならないことは、こうした語学の授業がビルドゥングの一種ではなく、むしろ省察の一種でなければならないのではないか、ということであろう。つまりそれは、言語と、また言語と人間との関係を脅かす危険への省察であるべきではないだろうか、ということである。だがしかし、同時に、言語がわれわれに語られないもの、語りえないものへの近しさをつねにもたらし限りにおいて、省察とは言語の秘密のうちに隠された救うものへの省察でもあるのだ」 (ÜT, 27f)。

ハイデガーにとって言語は、産業・技術社会を生きるための知識や技能といった「能力」ではない。そうではなく言語は、「在る」ということが眼前に開けてくる場という意味で省察の一種でなければならないと考えているのである。

そして興味深いことに、ハイデガーはそうした省察が「危険」へと差し迫るものであり、それが同時に「救うもの」への省察であると述べている。このハイデガーの主張の背景には、ヘルダーリンの詩歌「しかしながら危険のあるところ、救うものもまた育つ」が透けてみえよう。ここには技術が現存在を資源として駆り立てる危険そのものでありながらも、そのうちにこそ「本質のうちに取り戻す」救うものの生起があると示唆されている。だがしかし、救うものは「なんの準備もなく直接に捉えられるものではない」(GA7, 30)。救うものの道が開けてくるのは、「[……] 人びとを駆り立てる支配のうちに、どのようにしてそのもっとも深いところにさえ根を張り、そしてそこから成長するのか」(ibid) を熟考することにおいてのみである、とハイデガーは述べている。

3. 教育をめぐる、ハイデガーが示す論点

ここまで、講演録「伝承された言語と技術的な言語」を「学校」、「技術」、「言語」の3つの観点から整理して読み解くことで、技術の問題とともに語られる教育を浮き彫りにしてきた。ここから明らかになったことは、次の通りである。第一にハイデガーは、技術時代がもたらす実用性や有用性の尺度に照らされない学校や教師の在り方を「省察への目くばせ」という観点から提起しようとする。というのも、技術時代において理解されている技術は人間学的かつ道具的なものであるが、このような技術理解には正当性への安住という問題がともなうため、技術の本来の意味を捉えそこねてしまっている。そうした問題を自覚して技術を根本から理解しようとする、そこには「知としての技術」が明らかにされる。知としての技術は、人間学的－道具的な技術よりもいっそう根源的な意味を持っている。その根源的な意味とは、「覆いを取り去ること」であり、存在の出来であるとハイデガーは主張する。ではこうした技術理解がいかんにして可能となるのかと言えば、それは本来の言語を再考することにある。今日いわれる言語もまた有用性の価値思考のもとで情報伝達といった程度の意味にとどまっているが、言語とは本来「現前をもたらすこと」である。そうした本来の言語に立ち戻っていくなかに存在にひらかれた省察の意義が立ち現れてくる。

以上を踏まえ本章では、前章で明らかにした講演の内容をよりいっそう「教育」に焦点を合わせて検討することにしたい。本章で検討したいのは、教育をめぐるハイデガーが批判的に提起している論点についてである。以下では、特に注目すべき論点として(1)ハイデガーが批判的に捉えている「技術時代 (das technische Zeitalter)」の意味とは何であるか、(2)省察に対置される思想としての「ビルドゥング (Bildung)」⁶⁾のハイデガー的理解と意図は何であるか、の2点を考察する。

3-1. 存在の問いなき時代としての技術時代

まず注目したいのは、ハイデガーが技術時代を念頭において学校と教師のあり方を批判的に分析しているという点である。ここで素朴な疑問が生じてくる。「技術時代」とはいったい何を意味しているのか。同講演では現代技術が人間学的－道具的の観念にもとづいてると述べられていたが、1953年の講演「技術への問い」では現代技術が「総かり立て体制 (Ge-stell)」にもとづいていることが明かされている。ハイデガーはこの総かり立て体制の術語から、人間が「徴用物質」と化すことで現－存在が荒廃し、「真理の輝き」が「立てふさがれる (Verstellen)」危険を示している。

このようなハイデガーの洞察を突きつめると、それは存在棄却の思想と表裏一体であることが推察される。1936年から1938年に記された覚書『哲学への寄与論稿』では、いた

る箇所、存在者が存在に見捨てられているという「存在棄却」の時代状況が指摘されている。「技術という魔法をかけること〔……〕それによってすべては計算、利用、育成（Züchtung）、扱いやすさ、規制化に向かって突き進む」（GA65, 124）。こうした事態をハイデガーは「作ることと作りものの支配」（GA65, 131）であるとみる。つまり人間は誰にでも理解される客観的な正しさを真理とみなし、ありとあらゆる存在するものの様態を数値化・数量化し、すべてを操作可能なものとみなしてしまっている。こうした時代状況は、物として形作られうるものだけが考慮される事態であり、それゆえに存在の真理への道が閉ざされている。よってハイデガーは、存在棄却に象徴される時代状況を「技術時代」という語で批判的に示しているのである。

3-2. Bildung の問い直し

さてこうした時代批判にもとづく同講演はその帰結として、言語教育における Bildung の問題を提起するに至る。Bildung の語自体は終末部で一度登場するのみであるものの、そこで示される省察との対比はハイデガーならではの教育の語り口であり、きわめて重要な論点であるように思われる。ではハイデガーのいう Bildung とはいったい何を意味しているのだろうか。残念ながら同講演のみから Bildung の意味を明確にすることは難しい。よって以下では、Bildung について具体的に言及している講演録「学問と省察」（1953 年）と論文「真理についてのプラトンの説教」（1942 年）を手がかりに、ハイデガーが Bildung をどのように捉えていたのかを考察する。

(1) Bildung の語源的理解とフンボルト的理解

まずハイデガーのいう Bildung は、その語の由来である bilden の語源的理解と、フンボルトの Bildung 概念を土台としている。「「ビルデン（bilden）」という語は、第一に手本を置くことと、規則を打ち立てることをいう」（GA7, 64）。「Bildung は人間の前に手本をもってくることであり、人間はそれにしたがって自己のあらゆる行動を発達させるのである」（ibid）。そのうえでハイデガーは Bildung に対して次の見方を提起する。「〔……〕 Bildung 理念の創造とその支配は、どこからみても確からしく、また疑う余地のない人間の在り方を前提している。この前提は、不変の理性とその諸原理がもつ抗しがたい力への信仰にもとづいているにちがいない」（ibid）と。よってハイデガーは Bildung を、手本をもとに「所与の素質を整え仕上げる」（ibid）ことで確かな人間の在り方を実現していくことであると理解する。「学問と省察」ではこうした Bildung の見方を示す際に、フンボルトの言葉を引き、註を付している⁷⁾。ここからハイデガーが Bildung を bilden の語源から理解しつつ、その思想的根拠としてフンボルトの Bildung 概念にもとづいていることが確認できる。

(2) Bildung におけるアレーテイアの喪失

ではハイデガーは Bildung をいかに評価しているのか。ハイデガーはプラトンの「洞窟の比喩」を検討する一連の講義のなかで、Bildung の語源的な事実と問題点を指摘している。第一にハイデガーは、Bildung が「決して十分ではないが、最も早くパイデアという名を満たした語」(GA9, 217) であるとの見方を示す。パイデアとは「人間全体をその本質において向き変えることへの導き」(ibid) であり、ハイデガーはそこに「アレーテイア」をみている。アレーテイアとは真理を意味するギリシア語であり、ハイデガーはこれを $a - \lambda\eta\theta\eta$ 、すなわち「隠れ」を意味するレーテーと否定接頭辞アの合成体であると解釈し、「隠れなさ (Unverborgenheit)」と理解している。そして、こうしたアレーテイアとしての真理 (Wahrheit) と Bildung の関係について次の主張を示す。

「もしプラトンの「洞窟の比喩」が「ビルドゥング」と「真理」のことを示しうるとすれば、これらのあいだには現にあるひとつの本質的なつながりがあるのではないだろうか。実際、この関係はある。そしてその関係は、真理の本質とその本質の変容の仕方がはじめてビルドゥングをその根本的な構造において可能にする、ということにある」(GA9, 218)。

無論ハイデガーの Bildung に対する見方は講義録によって微妙な違いはあるものの、ここではハイデガーが Bildung と真理のあいだに本質的な連関があることを見ていたことがうかがえる。

一方でハイデガーは、Bildung の思想的展開において「この語が 19 世紀後半になって陥った誤解を忘れてはならない」(GA9, 217) との厳しい見方を示す。田端によれば、ここで言われる「誤解」とは 19 世紀における自然主義や心理学主義が生の理解を「精神の即物化」や「原理的な省察を拒絶すること」において方向づけたために、教育学においてもまた「心理学的方法」が支配的になり、Bildung が本来のパイデアとはかけ離れたかたちで理解され翻訳されたことにあるという (田端 2010, 201)。このような自然主義や心理学主義によって、Bildung は「隠れなさ」という存在の現前にかかわる視点を棄却してしまったのだとハイデガーは考えている。

以上からハイデガーは、技術時代における Bildung の時代の終焉を予示し、「遠方からの呼びかけに、この時代状況の呼びかけに応答する」(GA7, 64) 省察の時代が到来することを主張している。

「[……] 省察は、時代との関係において、かつて大切にされたビルドゥングよりも暫定的であり、より忍耐強くあり、より貧しくある。しかしながら省察の貧しさは、決

して計算されえない役に立たないもののなかで、諸々の宝がひかり輝くという豊かさを約束するものである」(GA7, 64f)。

以上、本章では「伝承された言語と技術的な言語」における論点として、技術時代の問題と Bildung の問題について取り上げ、両論点に対するハイデガーの見方や立場を検討した。ここから言えるのは、ハイデガーが両論点において「存在の問い」——とりわけ存在の真理——が閑却されていることを問題視しているということである。それゆえに同講演の終末では、技術時代や Bildung に対して省察を主題的に提起しようとしている。一方で、技術時代や Bildung の「終焉」(GA7, 64) を主張する背景には、たんに技術時代の実態や Bildung の思想を切り捨てることなく、むしろそれらを徹底的に問い直すことによってのみ見通される省察を看取するといったねらいがあるようにも思われる。

4. 教育をめぐるハイデガーの主張

さて以上の考察から、あらためて教育に対するハイデガーの主張がいかなるものであるのかについて述べたい。ハイデガーにとって教育は、技術時代という時代傾向の外在的な問題と、教育それ自体に内在する問題の双方から批判的に再考されねばならないものである。技術化の一途をたどる今日において、教育——とりわけ学校教育——はその有用化の要請を引き受ける場であってはならない。むしろ学校とは、技術時代からみれば、本来役に立たないものであり、その役に立たないことのもとの、事物の奥深い意義や本質をみようとすることが求められている。こうした教育の問題はさらに、教育における Bildung の思想からも検討される必要がある。Bildung とは本来「隠れなさ」にその根源があるにもかかわらず、今日いわれる Bildung にはそうした存在の出来の視点が覆い隠されている。ゆえに Bildung に関する最大の問題もまた、存在の問いが等閑に付されていることにある。以上の点を批判的に問い直し、事物の本質を捉えようとするとき、存在の出来にかかわる「省察への目くばせ」の視界がひらかれてくる。省察は役に立たないものへと人間を誘い、そうして人間が自らの存在を問う「現存在」へと変容すること、そして現存在が存在の側から現に在らしめられる「現－存在」へと跳躍する営みであると言える。そうした変容と跳躍の契機としての目くばせは、正当性に安住することから脱け出して、事物の本質を捉えようとする動性としての見やることであると言えよう。

以上の総括から次の結論が導かれる。第一に、ハイデガーは教育に批判的な立場を示す。それは技術時代や Bildung の思想を完全に拒否するものではないが、両者が「存在の真理」において今一度問い直されねばならない問題性を持っていることを指摘するものである。その問題性とはすなわち、今日の教育をめぐる「存在の問い」の不在である。ここからハイ

デガーは「存在」の視座を教育においても同様に求めていると考えられる。

ここで導かれた結論に対して、最後に率直に問うておきたいことがある。なぜ存在の視座が教育にも求められなければならないのだろうか。

この問いをこれまでの議論から答えるなら、それはやはり教育のうちに「存在の真理」がすでに本来根ざしているからであると言える。そうしてハイデガーは、技術時代のもとで「隠れなさ」の根源性が失われている今日に、人間や社会の発展・進歩の先ではなく、むしろその由来に立ち戻って思考することの重要性を提起していると考えられる。こうしてわれわれを根源へ引き戻そうとするハイデガーの試みに加えて筆者の視点から提起したいのは、「教育を問うこと」と「存在を問うこと」がともに「人間」に目を向けることから始まる思索であるという点で共通の土台を持っている、ということである。とくにハイデガー哲学において、人間は存在を問わずにはいられない「現存在」という術語をもって表現されており、そこには「在る」にかかずらう人間についての視界が開けているように思われる。ゆえに教育に存在の視座が求められるのは、「人間とは何か／誰か」の問いに根源的かつ新たな光を投げかけるためであると言える。そしてここで重要なのは、存在の問いと教育の問いにおいて、一方が他方の理論を塗り替えたり支配したりすることではなく、共通しつつ対立する両者の「抗争（Streit）」のなかに何を看取することができるのか、という点にあるのではないだろうか。そうした点に目を開かせるために、教育において存在の視座を提起する試みが行われる必要があると本稿は結論づける。

5. おわりに

本稿では、講演録「伝承された言語と技術的な言語」における議論を「技術時代の学校と教師」、「現代技術の人間学的－道具的観念の問題性」、「本来的な言語の再考」の観点から整理して紐解くことで、教育をめぐるハイデガーの批判が、存在の問いなき時代としての「技術時代」や「隠れなさ」を喪失した Bildung に向けられていることを明らかにし、両者がともに「存在の問い」を喪失していることを提示した。また以上の考察を総括することから、「存在の問い」ないし「存在」の視座が教育にも求められていることを結論として提示した。

最後にここまでに導き出された考察から、ハイデガーに着目した教育学研究の新たな方向性について提起したい。第一に本稿から提起したいのは、ハイデガーによる教育批判を、Bildung を糸口としてより具体的に解明することの必要性についてである。省察というハイデガーの主張は、Bildung の問い直しの立場を強調することで浮かび上がってくるように思われる。その際、ハイデガーのいう Bildung が彼の哲学の周辺概念としてではなく、根本にかかわるものとして浮かび上がってくるのが重要であるように思われる。ではどう

すればそれが可能になるだろうか。今後注目すべき論点として、ハイデガー哲学における人間学批判について挙げておきたい。たとえば今井が指摘するように、ハイデガーは自身の存在論の立場から人間学（とりわけ哲学的人間学）を批判しており、自身の哲学思想が人間学的に解釈されることを拒否していた（今井 2021）。しかしながら、そうした人間学への批判が彼の哲学のなかでいかに展開されているのかは具体的には明らかにされていない。よって Bildung を検討するための手がかりとして、ハイデガーによる人間学批判もあわせて検討されることが求められているように思われる。

くわえてもう一点提起したいのは、ハイデガーの教育批判を「抗争」として捉えることについてである。抗争概念自体は、1935/1936 年の講演「芸術作品の根源」における「世界と大地の抗争」から考えられることが多いが、それ以外にもたとえば神学と哲学、存在論と人間学・実存主義など、対立するものを思考すること自体がハイデガー哲学のモチーフであるようにも思われる。よって本稿では、ハイデガーが展開する教育批判の内実を Bildung や人間学批判を中心に、「抗争」の思考に即して解き明かすことを、ハイデガーに着目した教育学研究の今後の課題として提起したい。

結びに、冒頭で提起した「ハイデガーは教育を語っているのか」についてひとつの見解を示したい。本稿の考究から、ハイデガーは教育について語っていると考えられる。ただしハイデガーの教育の語りは一貫して批判的であり、教育のポジティブな側面に触れようとはしていない。おそらくハイデガーにとって教育は伝統的な人間観や時代傾向にとらわれた問題ばかりであり、それほど希望的に語れるものではなかったのかもしれない。だがそうだとすれば、ハイデガーに着目した教育学研究は、やはりこうしたハイデガーの抱く批判や問題意識を共有することで展開される必要があるのではないだろうか。以上、本稿から得られた視点を引き続き検討していくとともに、ハイデガー哲学のなかにほのかに光る教育をあらためて考えていきたい。

注

- 1) Heidegger, Martin, Heidegger, Hermann (Hg.) (1989) *Überlieferte Sprache und Technische Sprache*. St. Gallen: Erker. 以下、本書からの引用は（ÜT, 頁数）と文中に表記する。本書からの訳出に際しては、M. ハイデッガー、関口浩訳（2009）「伝承された言語と技術的な言語（一九六二年）」、『技術への問い』平凡社、149-179 頁を参照した。また本書以外からの引用として、クロスターマン版全集からの引用は（GA 巻数, 頁数）と表記し、訳出は日本語版『ハイデッガー全集』を参照した。引用文における強調は、いずれも原著による。
- 2) 我が国での最新の議論には、教育哲学会第 65 回大会ラウンドテーブル（2022 年 10 月 23 日）「存

在論は教育学にいかなる貢献を果たし得るか：「ハイデガーと教育学」という問題圏」がある。本ラウンドテーブルでは、森祐亮氏、池田全之氏、齋藤元紀氏、井谷信彦氏の四氏による報告と討論が行われている。

- 3) たとえば福原は次のように述べている。「ハイデッガーは教育については直接殆ど語っていない。しかし、彼の存在論が人間の本質の把握を基礎とするものである以上、彼の基礎的存在論そのものが、教育なる事象領域を先行的に基礎づける役割を果たすとは言えないであろうか?」、福原淑人 (1953) 「マルチン・ハイデッガーの基礎的存在論と教育学的研究」、『教育学研究』第20巻、日本教育学会、20-21頁。
- 4) こうした筆者の問題意識と同様の問いを提示し、ハイデガーと教育学の関係を述べたものに田端 (2010; 2013; 2021) があり、筆者も大いに示唆を得た。また同時に、ハイデガー自身の教育に対する言説を検討することの重要性を再認識することができた。
- 5) 同講演を教育的視座から検討する先行研究は確認することができなかったが、同講演を取り上げている研究はいくつかある。たとえば池辺 (2015)、木本 (2019)、Nelson (2019) を参照。
- 6) 本稿では Bildung に特定の訳語を与えず、「Bildung」または「ビルドゥング」と表記する。周知のように、教育学における Bildung は「陶冶」、「教養」、「人間形成」など依拠する哲学思想や教育の文脈に応じてさまざまに訳出される。本来であれば、本稿もハイデガーのいう Bildung に対して何らかの訳語を示さなければならないのだが、本稿で取り扱った議論のみではハイデガーのいう Bildung の適訳を定めることが困難に思われた。ハイデガーにおける Bildung の意味や訳出の仕方については今後の課題としたい。
- 7) ハイデガーによるフンボルトの引用は次の通りである。「[……] すなわち教養とは、人間の精神的で道徳的な営みを認識して感じ取ることから生じる気質であり、感覚と性格に対して、調和の取れた形であふれ出ていくものである」、Humboldt, Wilhelm, Freiherr von (1935) *Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluss auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*, L. Schneider. S.21f.

参考文献

- Agnese, Vasco D (2019) *Dewey, Heidegger, and the future of education: beyondness and becoming*. New York: Palgrave Macmillan.
- Heidegger, Martin, transl. Gregory, Wanda Torres (1998) Traditional Language and Technological Language, *Journal of Philosophical Research*, Vol. 23, pp. 129-145.
- M. ハイデッガー、関口浩訳 (2009) 『技術への問い』平凡社。
- 池辺寧 (2015) 「ハイデガーの技術論再考：医療技術の観点から」、『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』第11巻、奈良県立医科大学医学部看護学科、33-42頁。
- 今井康雄「世界への導入としての教育：反自然主義的教育思想・序説（六）」、『思想』第1161号、岩波書店、124-151頁。
- 井谷信彦 (2013) 『存在論と宙吊りの教育学：ボルノウ教育学再考』京都大学学術出版会。
- 木本伸 (2019) 「文学の言葉と技術の言葉：ハイデガーの詩的言語論をめぐる」、『広島ドイツ文学』第31号、広島独文学会、31-46頁。
- 森祐亮ほか (2023) 「存在論は教育学にいかなる貢献を果たし得るか：「ハイデガーと教育学」という問題圏」、『教育哲学研究』第127号、教育哲学会、133-138頁。
- Nelson, Eric S (2019) Heidegger's Daoist Turn, *Research in Phenomenology*, Vol. 49, pp. 362-384.
- 田端健人 (2010) 「ハイデガーのパイデア論：プラトン『洞窟の比喩』解釈から」、『宮城教育大学紀要』第45巻、199-206頁。
- (2013) 「教育の存在論は可能か?：ハイデガー学問論から」、『学ぶと教えるの現象学研究』

第 15 巻、宮城教育大学学校教育講座教育学研究室、1-18 頁。

——— (2021) 「教育学：ヒューマニズムを超える教育」、ハイデガー・フォーラム編『ハイデガー事典』昭和堂、240-241 頁。

田中智志編 (2019) 『教育哲学のデューイ：連環する二つの経験』東信堂。

Thomson, Ian D (2005) *Heidegger on Ontotheology: Technology and the Politics of Education*. Cambridge: Cambridge University Press.

(もり ふうな／京都大学大学院教育学研究科修士課程院生)

Reconsidering the Theory of Education in Heidegger's Philosophy: Rereading the Lecture 'Traditional Language and Technological Language'

Funa MORI

This paper aims to clarify the issues and arguments for education posed by Martin Heidegger (1889–1976), and to obtain a new direction for educational studies focusing on Heidegger's philosophy. To this end, this paper unravels what Heidegger tells us about education in his lecture entitled 'Traditional Language and Technological Language' which was held for schoolteachers in 1962, from the perspectives of 'school', 'technology' and 'language'. From this examination, it is clear that Heidegger's critique of education is based on two points: (1) the absence of the question of Being in the technological age and (2) the necessity to reconsider the concept of Bildung. Furthermore, it is elucidated that the question of Being, a central theme in Heidegger's philosophy, is similarly pertinent into reconsidering education. In conclusion, as a new direction for educational studies focusing on Heidegger's philosophy, this paper suggests that it is necessary to specifically elucidate Heidegger's critique of Bildung and anthropology. This paper demonstrates that it is necessary to explore Heidegger's critique of education as a new avenue to authentically comprehend the theme of 'Ontology and Education' through the lens of Heidegger's philosophy.